

## 清朝前期の五台山におけるチベット仏教

新 藤 篤 史

### はじめに

中国山西省東北部に聳える五台山は、文殊菩薩の住む「清涼山」として、古くは北魏（386-534）の末頃から聖俗問わず広く認知されてきた。五台の名が示す通り、主に5つの峰があり、それぞれ東台、西台、南台、北台、中台と称される。そして、これらの峰に囲まれた台懷は、五台山の中核として何時の時代も栄えてきた。五台山には数多くの寺院が点在し、その総数、古くは300余り、近世では約100寺とされている（日比野・小野〔1995、第1章〕）。北京側から見ると、五台山の背後には長城があり、そこからは広大なモンゴル高原が広がっている。そのため、五台山はモンゴル人にとっても近接した重要な仏教の聖地であり、モンゴル人が伝統的に信仰しているチベット仏教の寺院も数多く存在する。

1680年代、清朝はこの頃から緊迫し始めるモンゴル情勢への対応に迫られた。西モンゴルのジュンガルと現在のモンゴル国にあたるハルハの対立が、ハルハが清朝に帰順したことによってジュンガルと清朝の対立に移行しつつあったのである<sup>1</sup>。清朝は、一方のモンゴルとは統合し、一方のモンゴルとは対立するという複雑な状況となった。加えてジュンガルには、チベットのダライラマ政権との間に密接な繋がりがあった<sup>2</sup>。清朝にとって、ジュンガルとの対立にはチベットのダライラマ政権と対立する可能性も孕んでいたのである。

同じ1680年代、清朝は五台山における事業を活発化させている。これは、モンゴルとの宥和を目的とした、モンゴル人が信仰するチベット仏教を五台山の信仰母体とする一連の寺院修復・改宗に他ならない。しかし、清朝前期の五台山事業に関する従来の研究<sup>3</sup>では、チベット仏教に基づく寺院修復・

改宗を中心に論じたものではなく、例えばこれらの五台山事業が、何時、どのような手順で行われたか等は不明瞭である。本稿では、清朝前期の五台山におけるチベット仏教について、とくに清朝主導による寺院修復・改宗を、康熙帝（1654-1722、在位：1661-1722）が建立した「御製碑」（＊第1章参照）の対象寺院を中心に検討していく。その際、問題となるのは、18世紀以降のチャンキヤ2世（＊注13参照）による五台山寺院の修復・改宗が、清朝主導の寺院修復・改宗にどこまで関与しているかである。チャンキヤ2世による寺院修復・改宗は、1680-90年代の清朝による対ジュンガル戦の終結後に始められた。先行研究の中には、このチャンキヤ2世による寺院修復・改宗をもって清朝前期の五台山におけるチベット仏教が成立したとする意見もある（肖雨 [1998]、＊第2章2-2参照）。

## 第1章 『清涼山志』および先行研究における、清朝前期の皇帝による五台山事績

五台山についての基本史料『清涼山志』<sup>4</sup>の「御製五頂碑後跋」には、順治帝と康熙帝による五台山事績の概要が記されている。本章では、この『清涼山志』に加えて、膨大な五台山研究の中から、清朝前期の皇帝による五台山事業について主要かと思われる崔正森 [2000]、張元 [2011]、王敬雅 [2014] を参考に本稿の研究対象を把握していく。

清廷發源關東、注重喇嘛。世祖入關登極後、屢令喇嘛、啓建護國祐民道場。于順治十二年、十四年、各派數十喇嘛、往五臺山、啓建護國祐民道場。十八年、特命阿王老藏喇嘛、住持五臺山眞容院、督理番漢僧眾。至聖祖康熙二十三年以後、天下太平、國家富裕、或隔一二年往五臺山一次、或每年一次。由京至山、凡用膳住宿之處、各建行宮。而大者有三、一在眞定府、一在南臺下、一在臺懷。各大寺均有宴坐之所。于各寺院、或賜匾額、或賜詩文、或特加修葺、爲製碑記。御書宸翰、及頒賜珍物、多難悉錄。今但錄聖祖御製碑文十六道、以示其概。

（『清涼山志』「御製五頂碑後跋」）

（＊傍線は筆者。傍線部は括弧にして以下に取り上げる。）

まず「清廷は關東に發源し、注いで喇嘛を重んず。」であるが、その例として、崔正森 [2000 : 703] は、清朝の支配者層がヌルハチ<sup>5</sup>の時代から長白山<sup>6</sup>の下で仏教を信仰しラマを尊崇していたことをあげ、張元 [2011 : 16] は、盛京の実勝寺<sup>7</sup>でマハーカーラ像が安置されたことをあげている。このマハーカーラ像は、元朝（1271-1368）伝来ともいわれ、清朝が元朝の文化を継承した根拠としても取り上げられている。これは、もともと五台山に祀られ、モンゴル軍が南宋を攻める際には戦勝の祈祷が捧げられた像であった。以降、歴代の元朝皇帝の保護神とされ、明代にはモンゴル・チャハル部<sup>8</sup>に移ったが、1636年に清朝がチャハル部を制圧すると清朝の手に渡った。張元 [2011 : 16] は、この時すでに清朝と五台山の関係が間接的に生じたとしている。

順治帝（1638-1661、在位：1643-1661）は「順治十二年と、十四年に、各數十の喇嘛を派し、五臺山に往かせ、護國祐民道場を啓き建てた。」という。『清涼山志』「康熙序」には、「我が世祖章皇帝は、上は慈闈の爲に祝釐し、下は蒼生の爲に錫福し」とあり、順治帝が国家安寧の祈願を五台山で行ったことが窺える。「上爲慈闈祝釐、下爲蒼生錫福」は、広い意味での国家安寧を指しているが、「慈闈」には順治帝の生母・孝莊文皇太后（1613-1688）の意味もある。孝莊文皇太后は、モンゴル・ホルチン部のボルジギン氏<sup>9</sup>の出身で、順治と康熙の幼帝時代の後見人として、北京に遷都して間もない清朝の政權運営に尽力した人物として知られている。

それから「〔順治〕十八年、特に阿王老藏喇嘛に命じ、五臺山眞容院に住持させ、番漢僧眾を督理させた。」ことによって、清朝の五台山事業が具体的に始まった。崔正森 [2000 : 706-707] は、順治帝の寵愛した董妃の死が、順治帝を仏教に傾倒させ、皇帝自ら出家するためにガワン・ロサン・ラマ（阿王老藏喇嘛。＊以下、ガワン・ロサン。）<sup>10</sup>を五台山に入らせたとしている。張元 [2011 : 17] は、ガワン・ロサンが北京におけるチベット仏教ゲル

ク派<sup>11</sup>の寺院・崇国寺の出身であったことから、以降、五台山の「番漢僧眾」がゲルク派によって管理されるようになったと指摘する。ちなみに「眞容院」は、台懷の靈鷲峰の頂に位置する菩薩頂の別称であり、五台山チベット仏教寺院の首府とされている。

康熙帝の時代になって、「聖祖康熙二十三年以後に至り、天下は太平、國家は富裕、或いは一二年を隔て五臺山に往くこと一次、或いは年毎に一次なり。」とあるが、康熙帝の五台山事業といえば、1683年から始まる計5回の巡幸があげられる。この5回の巡幸については、王敬雅〔2014〕が『清実録』や『起居注』などを基に各巡幸のルートや同伴者等を特定し、入山の目的等を具体的に述べている。概略すると次のようになる。

1回目の巡幸は、1683年2月12日から3月6日までの間、康熙帝にとって初の五台山入山とされる。2回目の巡幸は、1683年9月11日から10月9日までの間、この時は孝莊文太皇太后が途中まで同行した。3回目の巡幸は、1698年正月27日から2月22日までの間、この時はハルハのジェブツンダンパ<sup>12</sup>等と共に入山した。ジェブツンダンパは、ハルハの王侯トシェート・ハーンの息子であり、チベット仏教僧としても民衆から尊崇されていた。当時、ジェブツンダンパはジュンガルとハルハの争いの影響で清朝に亡命しており、康熙帝とは親密な関係を結んでいた。康熙帝は、3回目の巡幸の前年（1697年）にジュンガルの指導者ガルダンを自害に追い込み、ジュンガルとの戦いを終わらせている。この巡幸には、康熙帝がジュンガルを打倒したことによってなされた清朝とハルハの統合が象徴されている。4回目の巡幸は、1702年正月28日から2月28日までの間、この時は皇太子胤祚、皇四子多羅貝勒胤禩、皇十三子胤祥が同行した。5回目の巡幸は、康熙1710年2月2日から3月4日までの間、この時の同行者は皇太子胤祚、皇三子胤祉、皇八子多羅貝勒胤禩、皇十子多羅敦郡王胤祜、皇十三子胤祥、皇十四子固山貝子胤禵であった。王敬雅〔2014：109-110〕曰く、これは皇四子胤禩を除く皇位継承者争いの主人公たちが一堂に会する形であり、当時、日増しに激化していた皇位継承争いを緩和する狙いがあったとしている。

康熙帝の五台山巡幸が、1683年から始まったとされていることに対し、

『清涼山志』では「至聖祖康熙二十三（1684）年以後」となるのはなぜか。ただ、『清涼山志』には計5回の巡幸についての記述がなく、康熙帝による五台山事績は「聖祖御製碑文十六道」に「以て其の概を示す」としているのみである。『清涼山志』によると、康熙帝は、1684年以降の内政安定期に、1、2年を隔て、もしくは毎年のように五台山を巡幸した。大規模な「行宮」を3ヶ所建て、五台山の諸寺院に「匾額」「詩文」を賜り、「修葺」を加えた。そして、五台山諸寺院の中で16の寺院に対して「御製碑」を建立した。16の寺院とは、南台の普濟寺、東台の望海寺、中台の演教寺、北台の靈応寺、西台の法雷寺、台懷においては菩薩頂大文殊院、殊像寺、碧山寺、台麓寺、羅睺寺、湧泉寺、広宗寺、顯通寺、棲賢寺、菩薩頂大真容院、白雲寺である。さらに『五台山碑文扁額聯楹詩賦選』<sup>13</sup>には、寿寧寺と鎮海寺の碑文が掲載されている。「御製碑」には、各寺院の成り立ちや周囲の自然描写、康熙帝が実際に寺院を訪れた時の様子、修復を施した経緯などが詳細に記され、康熙帝による五台山事績が凝縮されているともいえる。

『清涼山志』こそ未記載であるが、崔正森〔2000〕張元〔2011〕において最も注目すべきと思われるのは、五台山におけるチベット仏教がダライラマ派とチャンキヤ派に二分されたという指摘である。崔正森〔2000：745〕によると、これは1705年に扎薩克達喇嘛に任命されたチャンキヤ2世<sup>14</sup>が、康熙帝の勅によって五台山に入り、菩薩頂をはじめとする10寺を修復したことが発端となる。この時、チャンキヤ2世は修復した10寺を「黄教」に改宗したという。また、同時期にチャンキヤ2世は、五台山における鎮海寺、普樂院、財善洞、廣化寺、文殊寺、金剛窟の6寺を修行所として与えられたとしている。つまり、これらがチャンキヤ管轄の寺院となる。さらに崔正森〔2000：752〕は、ダライラマ管轄の21寺として、菩薩頂、羅睺寺、廣仁寺、台麓寺、普寿寺、寿寧寺、七佛寺、三泉寺、三塔寺、観音洞、玉花池、鉄瓦寺、湧泉寺、魚耐庵、南閣廟、普庵寺、宝華寺、円照寺、集福寺、慈福寺をあげている。ただ、この区分が何に基づくのかは示していない。

張元〔2011〕が崔正森〔2000〕に大きく異なるのは、五台山におけるチベット仏教が順治帝の時代からゲルク派であったとしている点である。張元

〔2011：24〕によると、チャンキャ2世が修復した10寺を改宗したのは1701年のことで、羅睺寺、寿寧寺、三泉寺、玉花池、七佛寺、金剛窟、善財洞、普寧寺、台麓寺、湧泉寺の10寺を「漢地佛教寺廟」から「格魯（ゲルク）派寺廟」に改めたとしている。この10寺の中に菩薩頂が入っていないのは、もちろん菩薩頂が順治帝の時代からゲルク派であったとしているからである。しかし張元〔2011〕は、このチャンキャ2世の修復・改宗について、典拠に崔正森〔2000〕をあげている。そして、この時期から五台山のチベット仏教がダライラマ派とチャンキャ派とに二分されたとしている。これに対応する史料としては、『五台县志』<sup>15</sup>の以下の記事があげられる。

明の永楽年間、ゲルク派開祖ツォンカパの弟子シャーキャ・イシェーが招かれ入京した後、五台山に来てゲルク派の教義を広め、はじめ中国式だったのをゲルク派流に改めた。康熙帝はゲルク派を信奉し、勅令によって五台山羅睺寺、寿寧寺、三泉寺、玉花池、七佛寺、金剛窟、善財洞、普庵寺、台麓寺、湧泉寺等十寺をゲルク派に改め、従来の僧を之に随わせゲルク派僧に改め、漢喇嘛なるものがこれによって誕生することになった。

（『五台县志』第5編宗教志、第1章佛教、第2節組織管理、1. 組織機構 p582）

清代、五台山の仏教管理機構がとても大きな変化を迎えた。五台山チベット仏教が特別に隆盛を極めたので、また分かれてダライラマとチャンキャ・フトクトの2つの大系に属する形となった。ダライラマ系統に属するところの菩薩頂、台麓寺等20強の所は、僧官がダライラマより選ばれ派遣され、併せて朝廷の任命を受けるという形をとった。〔中略〕チャンキャ・フトクト系統に属するチベット寺院としては鎮海寺、普樂院、集福寺、文殊院、広化寺、慈福寺6所があり、よってチャンキャラマが管轄し、〔チャンキャ自身は〕鎮海寺に駐留した。（＊傍線と訳は筆者）

(『五台县志』第5編宗教志、第1章佛教、第2節組織管理、1. 管理機構 p583)

## 第2章 五台山におけるチベット仏教寺院

それでは、五台山におけるチベット仏教が格式的にどのような位置づけがされ、またどのように分布していたかを検討していこう。五台山には、清代から「十大黄廟」(『五台山一百零八寺』p.34)と呼ばれる寺院が存在する。菩薩頂、羅睺寺、寿寧寺、三泉寺、七佛寺、善財洞、台麓寺、金剛窟、玉花池、涌泉寺である。この中で、康熙帝によって「御製碑」が建立されたのは、菩薩頂、羅睺寺、寿寧寺、台麓寺、涌泉寺の5寺である。つまり、これら5寺は、清朝前期に皇帝によって建立、もしくは認められた五台山チベット仏教寺院ということになる。ただ、「御製碑」にはチベット仏教に関する記述がないので、これら5寺が「御製碑」建立年にチベット仏教寺院であったかどうかは分からない。もちろん「御製碑」によらなくても、これら5寺の中にはもともとチベット仏教寺院として確認できる寺院もある。それでは、もともとチベット仏教寺院であった寺院は、清朝においてどのような位置づけがされたのであろうか。また、康熙帝の入山以降に建立もしくは改宗された寺院は、どのように五台山のチベット仏教寺院として確立していったのであろうか。

### 2-1 菩薩頂

菩薩頂については、順治帝の時代に同寺で住持したガワン・ロサンが手掛かりとなる。『清涼山志』『高僧懿行・阿王老藏傳』および「清涼老人阿王老藏塔銘」(蔣弘道 [1996])によると、ガワン・ロサンは北京の西山のチベット仏教僧であり、10歳の時に崇国寺に入り沙弥戒を受け、18歳の時に具足戒を受けた。その時すでに「韋駄 (ヴェーダ/veda)」を習い、「瑜伽」を究めていたとされる。1659年、ガワン・ロサンは順治帝の勅により五台山菩薩頂において「番漢經書」を「總理」することになり、その2年後に改めて順

治帝の勅が下り「五臺山真容院」に住持したようである。ガワン・ロサンは、1683年の「聖祖が臺山に幸臨」した際に、康熙帝から「清涼老人」の封号を賜り、五台山全体を統括する僧となった。1687年に示寂した際には、康熙帝が金を賜り葬儀を営んだとされ、4千余人が集まり、その死を惜しんだといわれている。

ガワン・ロサンが五台山に入山する前に住持していた寺院は、北京の崇国寺である。崇国寺とは、「大隆善護国寺」の旧称で、元朝の時代に開基されたチベット仏教寺院である。元、明を通じて、皇帝のチベット仏教擁護によって栄え、北京を訪れたチベット仏教僧の多くが住持した寺院であった。明代に名を「大隆善寺」、そして「大隆善護国寺」と改めた（陳鏘儀 [1996 : 42]）。また、明、清を通じて北京城内では、幾つかの廟会が存在したとされるが、その中で護国寺と隆福寺が突出していたといわれている（邱永君 [2015 : 57]）。東城の隆福寺に対して西城の護国寺が「西寺」となり、これが由来となって『清涼山志』に「燕京西山」と記されたのであろう。

ガワン・ロサンが五台山において住持した菩薩頂は、台懷の靈鷲峰の頂にあり、北魏孝文帝の時代（471-499）に創建された。唐代に寺名を真容院としたが、これは安置された文殊菩薩像が真容を現したことに由来する（『清涼山志』「大文殊寺」）。肖雨 [1996 : 9] によると、風水において菩薩頂は五台山の中で特別な場所とされる。その理由としては、まず五台山が中台を中心にして伸びていく5つの支脈で構成されているとし、それを5体の龍に譬えると、ちょうど真ん中の一脈が靈鷲峰にあたるからである。そして、菩薩頂はその龍の頭とされ、中国歴代王朝の君主から崇拝され護持を受けるようになったという。例えば、元朝の君主らは伝統的にチベット仏教の信仰に篤いモンゴル人であったため、その多くが五台山を巡幸したが、彼らはその度に菩薩頂に赴いている。明代になると、真容院は改修され寺名を大文殊寺と改めた。この改修においては、チベット仏教僧「短竹班丹」が「焚修」を皇帝から命じられている（『清涼山志』「明・憲宗」）。そのため、菩薩頂は明朝主導でチベット仏教寺院になったとされる。清代では、1684年に菩薩頂の前後の山門に「鎮」が設置され、「馬兵十名」「歩兵三十名」による守備体制が



整えられた（『清涼山志』「高僧懿行・老藏丹貝傳」）。さらに1690年には、殿堂の瓦が悉く「琉璃黄瓦」<sup>16</sup>に換えられ、様式からしてまさしく五台山の首府たる存在となった。

## 2-2 羅睺寺

羅睺寺は、壺鷲峰の麓にあり、高明和〔1998〕肖雨〔1998〕によると1705年、張元〔2011〕によると1701年のチャンキャ2世による10寺修復・改宗によって、「黄廟」または「格魯（ゲルク）派寺廟」になったとされる。高明和〔1998：23〕張元〔2011：24〕は、羅睺寺、寿寧寺、三泉寺、玉花池、七佛寺、金剛窟、善財洞、普庵寺、台麓寺、涌泉寺の10寺をチャンキャ2世による修復・改宗寺とし、「十大黄廟」の中では菩薩頂を外して普庵寺を入れている。肖雨〔1998：11〕は、羅睺寺、寿寧寺、三泉寺、玉花池、七佛寺、金剛窟、善財洞、普庵寺、涌泉寺、菩薩頂の10寺をチャンキャ2世による修復・改宗寺とし、「十大黄廟」の中では台麓寺を外して普庵寺を入れ、また菩薩頂を改宗対象とする。「黄廟」の解釈は、チベット仏教そのものであったりゲルク派であったりするが、高明和〔1998〕張元〔2011〕肖雨〔1998〕はそれぞれ修復・改宗前の10寺とその住持僧を「五台山十大青廟」「漢地佛教寺廟」「青衣僧」とし、チャンキャ2世が修復・改宗する前の10寺はチベット仏教寺院ではなかったとしている。

つまり、羅睺寺がチベット仏教寺院となったのは、チャンキャ2世による修復・改宗後ということになる。しかし、例えば『清涼山志』「高僧懿行・老藏丹貝傳」には、ガワン・ロサンを継いで菩薩頂の座主<sup>17</sup>となったロサン・テンパ（老藏丹貝）<sup>18</sup>に関する次のような記述がある。モンゴルの「大喇嘛」として伝えられるロサン・テンパは、はじめ「衛籍」に入り趙氏となり、北京の崇国寺の僧に付いて「導師」となった。また、かつては「土波沙門藍建国巴」を師としていた。その後は五台山に入り、中頂と羅睺寺に居たとされる。1659年、「清涼山住持」に選出され、「五頂精藍」の監修を「奉命」した。1684年、菩薩頂の大殿において「碧琉璃瓦」を「覆った」というので、菩薩頂は黄色の瓦となり皇帝直属の建築物となった。つまり、ロサ

ン・テンパによって菩薩頂は五台山の首府となったのであろう。このように、皇帝の命で菩薩頂に住持したチベット仏教僧が羅睺寺に居たということは、羅睺寺が順治帝の時代にはすでにチベット仏教寺院であったことを暗示している。

### 2-3 台麓寺

台麓寺は、康熙帝が虎を射止めた場所として伝わる「射虎川」の近傍に建立された寺院である。「射虎川臺麓寺碑文」（『五台山碑文扁額楹聯詩賦選』）によると、康熙帝は、1683年の巡幸の際に台懷から数十里離れた場所で、たまたま居合わせた虎を射止めたという。また『清涼山新志』「崇建・清」によると、1685年に「射虎川臺麓寺」が「創建」されたとあり、さらに「大喇嘛一員格隆班第二十五衆」が「設立」されたとある。「御製碑」の対象寺院においては修復が多い中、新たに寺院を建立されること自体珍しく、しかも僧官の設置もあったことから、台麓寺が他の寺院に比べて特別な寺院であったことが窺える。実際、台麓寺には政府の出先機関である行宮が置かれ、康熙帝をはじめ歴代の皇帝たちも巡幸の度に台麓寺に駐駕した。僧官「大喇嘛一員格隆班第二十五衆」の設置から、台麓寺がチベット仏教寺院として建立されたことは疑いがないと思われる。さらに、ここでは清朝による五台山寺院の管理体制から、台麓寺がどのように位置づけられたかを把握したい。

「欽定理藩部則例」（張羽新 [1988]）によると、「菩薩頂所属寺」には「虚銜達喇嘛」が設けられ、選出の権限が「菩薩頂扎薩克喇嘛」にあったとされる。さらに、羅睺寺の「虚銜達喇嘛」のみ、決定の際には「台麓寺達喇嘛」の例に従って「理藩部」<sup>19</sup>に報告したとされる。ちなみに、その他の菩薩頂所属寺は、玉花池、寿寧寺、金剛窟、涌泉寺、七佛寺、三泉寺、善財洞、普庵寺である。菩薩頂には僧官を選出する権限、羅睺寺と台麓寺には理藩部への報告が課せられていることから、菩薩頂、羅睺寺、台麓寺の3寺が、他の寺院より上位に置かれていたことが窺える。『清涼山新志』「崇建・清」によると、菩薩頂、羅睺寺、台麓寺の3寺には、1698年に清朝から「金銀」「寶珠」「龍緞」「香燭」、そしてチベット仏教の儀礼に基づく「哈達（カ

ター)」が献じられている。

## 2-4 寿寧寺

寿寧寺は、五台山における最古のチベット仏教寺院とされ、元朝の頃の改宗とされる。かつてモンゴル軍が南宋を攻める際に五台山でマハーカーラ像に祈祷が捧げられたと伝えられているが、これはチベット仏教サキヤ派の名僧でフビライ（1215-1294）の金剛阿闍梨でもあったパクパ（'phags pa = blo gros rgyal mtshan, 1235-1280）の令によって、寿寧寺の僧ダンバ（胆巴、1270-1303）<sup>20</sup>が行ったことであった。

建立道場、行秘密呪法、作諸佛事、祠祭摩訶伽刺（マハーカーラ）、持戒甚嚴、昼夜不懈（「元趙孟頫書膽巴碑」『歴代碑帖法書選』<sup>21</sup>）

盛京の実勝寺の碑には、元朝伝来のマハーカーラ像についての記述がある。実勝寺碑文は、満、蒙、漢、蔵の四体字で構成され、石濱〔2011：44〕によると、4言語とも独自の情報を持ち単純な翻訳ではないという。しかし、マハーカーラ像については概ね同じ内容であり、概略すると「フビライの時代に、パクパがマハーカーラ像を鑄造して五台山に祀った。その後、マハーカーラ像はチベットのサキヤの地に持って行かれ祀られた。後にチャハルのリンデン・ハーンがシャルパ・フトクト・ラマを招聘した際、マハーカーラもチャハルに請来された。」となる。

その後、マハーカーラ像は1638年に盛京で建立された実勝寺に安置された。つまり、モンゴル・チャハル部を征圧し、1636年に成立した清朝が、モンゴル伝来のチベット仏教を導入したのである。清朝のチベット仏教に対する信仰や保護体制のルーツには、その一つとして五台山の寿寧寺が関与していたのである。いうまでもなく、寿寧寺はもともとチベット仏教寺院であり、おそらくチャンキヤ2世の修復・改宗によってサキヤ派からゲルク派に変わったのであろう。

## 2-5 涌泉寺

涌泉寺に関しては、「御製碑」の建立年が1689年であり、1683年の康熙帝による巡幸後に清朝の手が入ったものと思われる。この時すでにチベット仏教寺院であったかどうかは分からない。ただ、『欽定清涼山志』の絵図によると、涌泉寺からは台麓寺を経由しなければ台懷に入れず、おそらく涌泉寺に関する事業は台麓寺を拠点に行われたものと思われる。チャンキャ2世の修復・改宗によってチベット仏教寺院になったのか、もともとチベット仏教寺院であったのを宗派のみゲルク派と改められたのかは分からない。

## おわりに

清朝主導によって修復・改宗された五台山のチベット仏教寺院は、以下のように割り出せる。まず、康熙帝が建立した「御製碑」の対象寺院のうち、菩薩頂、羅睺寺、台麓寺、寿寧寺、涌泉寺の5寺は、後世に「十大黃廟」と呼ばれる寺院群に含まれるので、チベット仏教寺院に他ならない。問題は、これら5寺が18世紀以降のチャンキャ2世の修復・改宗によってチベット仏教寺院となったかどうかである。寿寧寺が元朝以来のチベット仏教寺院であったことは、マハーカーラ像の安置等が示している。また、菩薩頂、羅睺寺、台麓寺においても、崇国寺ラマの住持や「扎薩克喇嘛」の設置等で、チャンキャ2世が修復・改宗する以前から、すでにチベット仏教寺院であった。それがゲルク派であったのかどうかは判断材料が乏しくて分からない。しかし、それゆえに清朝主導による修復・改宗であった可能性も指摘できる。五台山事業の手順としては、菩薩頂を五台山の首府とし、菩薩頂を頂く靈鷲峰の麓にある羅睺寺をチベット仏教僧の拠点とし、清朝が新しく建立した台麓寺をチベット仏教寺院として政府の出先機関とする。清朝は、これらチベット仏教寺院3寺を中心に五台山事業を進めたのであろう。

- <sup>1</sup> 1686年のクレーンベルチルの会盟の後、ジュンガルとハルハが対立。1690年、ジュンガルが内モンゴルに侵入、清朝が迎え撃つ。1691年のドロノールの会盟で、ハルハが清朝に帰順。1696年から、康熙帝によるジュンガル親征が開始された。
- <sup>2</sup> ジュンガルと共にオイラートの一支であったホショトのグシハーンがチベットを統一し、1642年にダライラマを擁立し政権を発足させた。
- <sup>3</sup> 第1章で取り上げる崔正森 [2000]、張元 [2011]、王敬雅 [2014] は、従来の清朝による五台山事業に関する研究を包括するものといえる。日本における五台山研究の金字塔『五台山』（日比野・小野、1995）は、五台山通史の一部として清代を取り上げているが、本稿が課題とする「清朝主導のチベット仏教に基づく寺院修復・改宗」のように限定的ではない。
- <sup>4</sup> 時代ごとに編纂された五台山についての文献。名所の位置、寺院そのものについて、名士の参詣に関する逸話、歴朝皇帝による事績等を網羅的に掲載している。本稿では「乾隆二十年重刊本」を使用。これは明の鎮澄が著した『清涼山志』に清朝前期の事績を加えたもの。また『清涼山新志』は康熙帝の勅によって1701年に成立した。
- <sup>5</sup> 1559-1626。建州女真の首長からマンジュ国のハンとなり、清朝の前身「後金国」を建国した。
- <sup>6</sup> 中国吉林省と北朝鮮两江道の国境地帯にある白頭山。明初から仏教聖地として朝鮮人や女真人に信仰されていたといわれる。西側の遼東への経路には建州衛があり、ヌルハチの集団は伝統的に仏教を信仰していたとされる。
- <sup>7</sup> 後金国2代目ハンのホンタイジ（1592-1643）の時に勅建（1636年着工、1638年竣工）。1636年にモンゴル・チャハル部を制圧したことが、その名の由来（実勝寺＝真に勝利せる寺）。
- <sup>8</sup> チンギスの直系が継承する集団。いわゆる正統ハーンはチャハル部の首長のみの称号。明代では分裂と統合を繰り返したが、清朝に制圧される直前はフフホトを拠点とした。
- <sup>9</sup> チンギスの次弟ジョチ・ハサルを祖とする名家。ホルチン部は大興安嶺北部から嫩江、遼河、開原と鉄嶺の西北辺外等と移動した集団で、清朝とは婚姻関係を結び連合体制を形成した。
- <sup>10</sup> 阿王老藏喇嘛は ngag dbang blo bzang bla ma の音写と思われるが、チベット語史料では当該僧は見出せなかったため、本文ではカタカナ表記のみとする。
- <sup>11</sup> チベットにおいて第2の釈尊といわれるツォンカバによって14世紀に形成される。ダライラマを輩出し、1642年以降のチベット政権を担った。黄帽派とも称される。
- <sup>12</sup> rje btsun dam pa=blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan, 1635-1723。
- <sup>13</sup> 五台山に関する「碑文112通」「扁額329幅」「楹聯449副」「詩賦607首」を1997年に書写し編纂したもの。この中には『清涼山志』未掲載のものも含まれている。
- <sup>14</sup> 清朝領内におけるチベット仏教の寺院や僧等を管理する僧官の頂点に位置づけられたのが扎薩克達喇嘛。池尻 [2013] によると、青海の高僧チャンキヤ2世ガワン・ロサン・

チューデン・ペルサンポ (ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po, 1642-1714) は、1701年にドロンノールの「扎薩克大喇嘛」となり、1706年に国師号を授かった。

- <sup>15</sup> 前漢から2千年以上もの歴史をもつ「五台」に関する地方志。金代から歴朝ごとに記録されたが、1884年から百年もの間中断され、1984年から記録されたのが本書。五台県の自然風貌、政治、軍事、経済、文化、風俗民情などの状況が記されている。
- <sup>16</sup> 黄色の瓦は皇帝直属の建築物のみ用いられ、格式は最も高い。
- <sup>17</sup> 「扎薩大喇嘛制度」では「菩薩頂扎薩大克喇嘛」と称される僧官。
- <sup>18</sup> 老藏丹貝は blo bzang bstan pa の音写と思われる。カタカナ表記に関しては注10参照。
- <sup>19</sup> 清朝は、モンゴル、チベット、新疆等を藩部とし、それら藩部の行政事務統轄を目的とする官署として理藩院を設置、1906年に理藩部と改称。
- <sup>20</sup> 胆巴は dam pa の音写と思われる。カタカナ表記に関しては注10参照。
- <sup>21</sup> 元代の著名な「書法家」趙孟頫 (1254-1322) の筆による「胆巴碑文」。胆巴はフビライから「大覚普慈広照無上帝師」の称号を送られたチベット仏教僧。碑文の影印は故宫博物院に所蔵されている。

## 史料・文献

『清涼山志』（乾隆二十年重刊本・民国郭恕君鉛印本・民国二二年蘇州弘化社鉛印本）

→杜潔祥 主編『中國佛寺史志彙刊』（第2輯第29冊228・229、明文書局、1980）

『清涼山新志』（老藏丹巴重編、康熙四十年武英殿刊本）

→杜潔祥 主編『中國佛寺史志彙刊』（第3輯第30冊、丹青圖書、1985）

『欽定清涼山志』（清 乾隆五十年奉勅撰、嘉慶十六年武英殿刊本）

→《續修四庫全書》編纂委員會編『續修四庫全書 史部』（上海古籍出版社）

『五台山碑文扁額楹聯詩賦選』（王学斌／鄭志忠／呂更美編、山西教育出版社、1998）

『五台県志』（趙培成主編、山西人民出版社、1988）

「元趙孟頫書膽巴碑」『歴代碑帖法書選』（編輯組編、文物出版社、1982）

日比野丈夫・小野勝年『五台山』（平凡社、1995）

崔正森『五台山佛教史』（山西人民出版社、2000）

「清涼老人阿王老藏」『五台山研究』1999年3期

崔正森主編『五台山一百零八寺』（山西科学技術出版社、2010）

張元『格魯派在五臺山的發展』（碩士學位論文、西藏民族學院、2011）

王敬雅「康熙西巡五臺山若干問題探析」（故宮博物院、Palace Museum Journal、2014年1期）

蔣弘道「清涼老人阿王老藏塔銘 節略」『五台山研究』1996年1期

（＊「清涼老人阿王老藏塔銘」掲載）

陳鏘儀「護国寺」『北京档案』1996年5期

邱永君「護国寺古今談」『百科知識』2015年6期

肖雨「菩薩頂佛教歷史」『五台山研究』1996年1期

「羅睺寺佛教史略」『五台山研究』1998年1期

高明和「羅睺寺建築与塑像概述」『五台山研究』1998年1期

張羽新『清政府与喇嘛教』（西藏人民出版社、1988年版）（＊「欽定理藩部則例」掲載）

石濱裕美子『清朝とチベット仏教－菩薩王となった乾隆帝－』（早稲田大学出版部、2011）（＊「実勝寺碑文」掲載）